

IWE (International Welding Engineer) 取得から 現在に至るまで

一般財団法人 日本海事協会

齋藤 雄一



1. はじめに

大阪大学大学院在学中に国際溶接技術者 (IWE) コースが新設され、その1期生として応募することができました。当時大学院にて日夜研究に没頭し充実した研究生活を送っていましたが、せっかく大学にて溶接・接合を学んできたのだからということで、IWE コース設立の話聞いてすぐに飛びついた様に記憶しています。当初は1期生としてどの様な関門が待ち受けているのか分からない不安な中でのスタートとなりました。それでも、講師の方の実体験を交えた懇切丁寧な専門講義を受けながら、資格取得のために必須となる講義の単位取得に奔走し、日々の研究の合間にテキスト「溶接・接合技術特論 (産報出版)」を読み尽くし、また IWE の資格取得に向けて熱意を持った同志と支え合いながら、無事資格取得に至ることができました。

その後、船級協会である一般財団法人日本海事協会に入社 (入会) し今日に至りますが、IWE 資格が私の実務に如何に関わってきたかをご紹介します。

2. 社会人生活のスタート

大学卒業後、一般財団法人日本海事協会に入会し、材料艀装部という部署へ配属されました。船級取得のためには船舶建造に用いられる溶接施工法 (溶接施工要領書) の承認が船級規則により求められており、材料艀装部では、この承認業務を行っております。IWE 資格取得に際して溶接施工要領書の書き方についても学びましたが、ここで早速その知識をフル活用することができました。基礎知識として溶接施工要領書の中身については理解していたため、承認業務において何をチェックすべきかをスムーズに習得することができました。また一方で、造船業界における実際の溶接施工要領書に山ほど触れる中で、その基礎知識の積み上げにも繋がったと思います。こうした業務にあたり、社内にて IWE 資格の有無は必須ではありませんが、取得していたことでより広い視点で、かつ、意欲的に業務に臨むことができ、とても効率的にノウハウを習得することができた様に思います。また、材料艀装部では、造船所、鉄鋼メーカーの方々と共に溶接に関する共同研究やガイドライン策定の場に参加する機会も多くありました。当初、私自身の船舶に関する知識は乏しかったのですが、IWE 資

格取得に際して積み上げた知識を幹として、次第に船舶に関する知識を補っていくことができました。また、IWE 資格を取得していたことで、少なくとも溶接については他社の方とスムーズにコミュニケーションを重ねることができたのではないかと思います。

その後、ジョブローテーションにより、かねてより興味があった船舶の図面審査業務を行う船体部へ異動となり、ばら積み貨物船の図面審査を担当することとなりました。船体部では材料艀装部に比べると溶接に触れる機会は少し減ってしまいましたが、設計サイドの視点から、船級規則における要件を基に溶接に関する設計上の注意点を学び、船舶に関する知識を積み上げました。

3. 現場検査員として

その後、いよいよ「現場」である支部への異動となりました。支部への赴任後は検査員として造船所、船体ブロック工場、船用機器メーカーにおいて、多くの溶接の現場に触れることができました。検査業務の大部分を占めるのは、建造中船舶の溶接部に対する外観検査です。当初は船体ブロック内を這いつくばって移動しながら、部材の溶接外観をチェックすることで手一杯なところもありましたが、部材の取り付け忘れや、配材ミスは船舶航行において安全上大きな問題となり得ることから、設計図をなるべく頭に詰め込んで検査に臨む様、意識していました。また、図面上では把握されなかった、例えば溶接線とブラケットトウの重なり等の設計上の問題についても見逃さない様、常に留意しました。

各社における溶接施工要領書等の資料をインプットして配材・仮付けの状態を確認すると、そこから何が出来上がるかをイメージすることができます。造船所にて建造中の船舶を検査させていただく際、溶接が全て完了した状態を見せていただく場合が多いのですが、仮付け状態のブロックを見せていただくことも大切にしていました。IWE 資格取得の際に積み上げた知識を活用し、これから行われる溶接と完成したブロックをイメージしつつ、例えばタブ板の使用法、溶接条件、運棒等、気になることがあれば直ぐに確認させていただく様にしていました。私自身はほぼ溶接をした経験は無いため、こうして実際に溶接士の方とも意見を交わしつつ御教示いただく中で得られたノウハウを、次の検査にも生かすことができたと考えています。

材料艀装部における業務として溶接施工法承認を挙げましたが、支部から検査員が承認試験に立ち会うこととなり、私も多くの承認試験を担当いたしました。印象深いものとして、船級規則の改正により、ある船用機器について新たに溶接施工法の承認が必須となり、その船用機器メーカーの方から溶接施工法承認についてゼロからご相談いただいた件がありました。メーカーにて策定された pWPS (preliminary Welding Procedure Specification : 承認前溶接施工要領書) を如何に最終的な溶接施工法承認に結びつけていくかということで、何度も協議を重ねました。これもまた、IWE の資格取得に際して積み上げてきた知見が大いに活用できたと感じた一例でした。

現在は船体部に戻り再び図面審査を担当していますが、支部での時間はその間の国内・海外の長期出張も含めて、溶接の現場に触れることができる、とても濃密な時間でした。図 1 に支部業務で海外出張した時のひとコマを示します。



図 1 海外長期出張中のひとコマ

4. これまでを振り返って

大学での IWE 資格取得から現在までを振り返ってみると、IWE 資格により、厳密には IWE 資格を取得するために積み上げてきた知識・経験がベースとなり、溶接に直面する自身の姿勢や課題に対するアプローチが変わったと考えています。私のケースでは大学時代に取得した IWE 資格を実際の業務においても活用し、より効率的に船舶検査員としてステップアップできたのではないかと考えています。また、IWE 資格を持つことで自身の溶接に関する知識をアップデートしていかなければという思いも芽生え、それがさらに自身の成長に繋がる良いサイクルとなっている様に感じています。資格取得に際してはタフな日々が続いたことを記憶していますが、IWE コースを選択して良かったと今噛みしめています。

最後に、IWE コース開設にご尽力いただいた先生方、お世話になった講師の方、また共に支え合いながら資格取得に挑んだ同期生に、ここに改めて感謝申し上げます。

<略歴>

齋藤雄一（さいとう ゆういち）

2008年 大阪大学 工学部 応用理工学科 卒業
2010年 大阪大学 大学院工学研究科 マテリアル生産科学専攻 修了
2010年 一般財団法人日本海事協会 入会 材料艀装部 配属
2012年 船体部 配属
2016年 北九州支部 配属
2019年 船体部 配属
現在に至る